

丹下健三

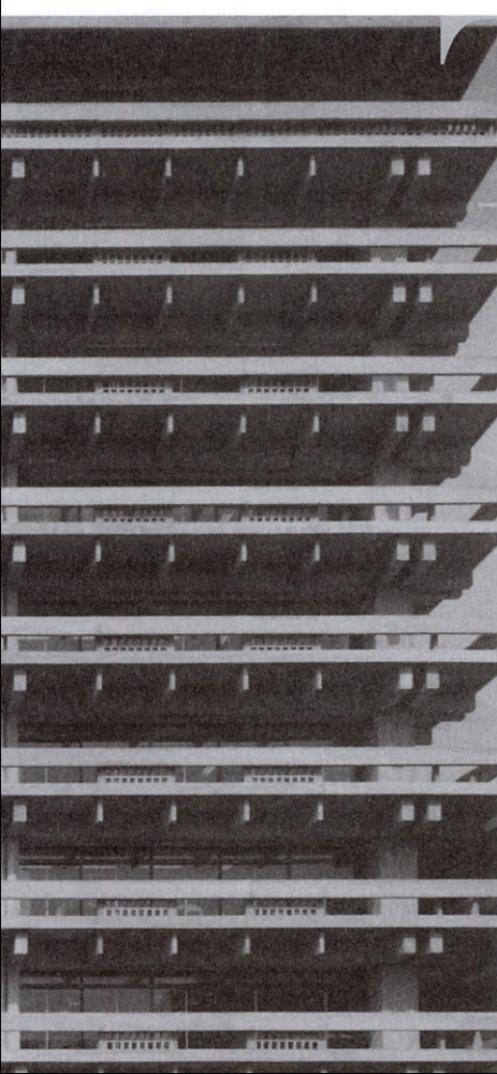
人間

デザインおぼえがき 復刻版

と

TANCO

建築



彰  
国  
社

### 復刻に寄せて

父、丹下健三の旧著である『人間と建築』『建築と都市』の初版が出版されてから四〇年以上の歳月が流れました。そのような長い時間を経て、また経済的にも社会的にも時代背景の異なる現代において、本書が必要とされ、復刻されることとなり、息子として素直に嬉しく思います。

父が国内で大規模プロジェクトを次々と手がけた一九五〇年代から七〇年代は、日本が戦後の復興から高度経済成長長期へと突入していった、たいへん勢いのある時代でした。数々の国家的プロジェクトが進められたその時代に活躍することのできた父を、現在、同じ建築業界に身を置くものとして、少し羨ましく思うところもあります。

しかし復刻にあたって、二冊を読み返しあらためて感じたことは、「丹下哲学」ともいうべき、父が築き私どもがいまも中心に据えている建築哲学は、そのころからあまり変わりが無いというものでした。もちろん、時代に合わせて進化、発展した考え方もありますが、根本的な部分ではあまり変わっていません。

本書に「一九六〇年代は、私の関心はより文明的な、あるいは未来学的な立場に立って、機能主義から構造主義へ、そうしてまた建築から都市への方向に向けられてきた」とありますが、おそらく父は、日本の建築家の中で、はじめて都市というものに向き合い、それを建築と

同じ位相で考えた人ではないでしょうか。高度経済成長期にあった一九六一年に発表された「東京計画一九六〇」の中で、父は、都市の本質をネットワークとコミュニケーションにあるとし、その中心に「人」を据えました。「人」が移動するための交通システムであり、「人」がコミュニケーションをとるための場、それらが計画の基本にあつたといえます。父はまた、情報化社会において大切なことは、人がコミュニケーションをとり、アイデアを交換しあう自由な環境を創造することだ、と話していました。それが、未来に向けてすべての都市が選択すべき道である、と。

工業化社会から情報化社会に転換するとき、そこには「社会」という大きな共通項がありました。しかし現代は「社会」よりも「個」が尊重される時代であるといえます。私も、「人」を大切にした父の発想を受け継ぎ、個人がより快適に過ごせる空間、一人ひとりが心地よいと感じる空間づくりを設計の基本とし、父が歩んだ道をこれからも習い進んでいきたいと思っています。末筆ながら、本書の復刊にあたって種々ご尽力いただきました関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

二〇一一年九月一日

株式会社 丹下都市建築設計 代表取締役社長  
丹下憲孝

# 人間と建築

デザインおぼえがき

## 丹下健三

## 序

この小冊子は、私が折にふれて発表してきた文章を多少整理しなおして、まとめたものである。ふりかえってみると、私の考えかたやその対象とするところは、大きく一九六〇年前後を境にして変わってきているように思える。一九四〇年代、一九五〇年代、私は機能主義の立場に立ちながらも、現実と伝統といったものを見つめることによって、それを乗りこえようとしていたといっている。

しかし一九六〇年代は、私の関心はより文明史的な、あるいは未来学的な立場に立って、機能主義から構造主義へ、そうしてまた建築から都市への方向に向けられてきた。

東京計画―一九六〇とか、一九六五年の日本列島の将来像―東海道メガロポリスの形成は、その一つの現われであるが―これらについて詳しくは講談社現代新書『日本列島の将来像』を参照されたい―、またプロジェクトとしても、アーバン・デザインの領域のもの比重が多くなってきているが、しかし、こうした問題意識の変化は、個々の建築デザインにも、またその方法論にも現われている。

この小冊子はこうした経過を反映するよう、ほぼ年代的に分類されていて、『人間と建築』には前半の時期のものが、そして『建築と都市』には後半の時期のものがまとめられている。

彰国社の方々のご親切なおすすめがなければ、こうした本として出版されるなどということは起こらなかっただろう。それについても、出版にあたってのわずらわしい整理や編集の仕事を引き受けてくださった彰国社の山本泰四郎さんに、心からの感謝を申しあげたい。

一九七〇年四月六日

丹下健三

## 目次

復刻に寄せて 丹下憲孝

iii

序

I 建築家論

- 1 日本の建築家
- 2 民衆と建築

9 3

II 現代建築と芸術

- 1 現代の状況
- 2 伝統と創造について
- 3 対立を含んだ芸術の協同
- 4 芸術の創造性について

55

III 現実と創造

- 1 建築の創造——その姿勢と方法
- 2 日本の伝統における創造の姿勢——弥生的なものと縄文的なもの
- 3 現代建築における創造の姿勢
- 4 創造の方法——日本建築にあらわれた典型
- 5 美的なものと生命的なもの
- 6 現代都市と日本の伝統——伝統の克服

103

IV 技術と人間

- 1 機械と手の葛藤
- 2 デザインと構造
- 3 フィクションとリアリティ

173

V 機能と空間

- 1 美しきもののみ機能的である
- 2 「はじめに機能がある」と「はじめに空間がある」

213

VI 設計の経験

- 1 広島計画——都市のコアについて
- 2 東京都庁舎の経験
- 3 香川県庁舎の経験を通じて——伝統の克服

245

解説 藤森照信

289

作品

293

凡例

- 文中①—①から①—①⑥は、本書巻末の写真番号を示す
- 文中⑩—①から⑩—②⑤は、『建築と都市——デザインおぼえがき』巻末の写真番号を示す

## 1 建築の創造——その姿勢と方法

建築の創造は社会の要求にこたえて物質的役を建設することであるが、いったん建設された建築は、逆に現実に関与し、それを改造してゆくものである。またその芸術的な形象は、現実を反映するものであるが、一方それはこの現実を豊かにしてゆく。現実と、建築の創造は、こうした相互の働きかけを通じて、結ばれている。であるから、建築の創造は、現実の構造をその土台と上部の統一において認識することを必要としている、とともに現実を歴史の展開のなかに、主体的にとらえることを必要としている。

こういう意味で、建築の創造は、現実認識の一つの特殊な形態である、といつてよい。

建築がこの現実の構造の土台であるとともに、上部を形成するものであるといふことは、また、建築が機能的なものと表現的なものを、あわせもっていることとも対応するものである。この矛盾にみちたもの、機能的なものと表現的なもの、あるいは内容と形式——それらはそれぞれに固有の原理をもつ本質的なものであるが——、それを統一にもつてゆくこと、そのことが建築の創造そのものであるといつてよい。そうしてこのような建築の創造は、現実の構造の土台と上部を概念的に分析することから得られるのではなく、それを形象的に統一することによって行なわれるのである。

る。しかしこの自明のことが、つねに正しく行なわれたり理解されていたとはいえないのである。

一九世紀の観念論美学は、建築の価値をこの表現的なものにおいて、その機能的なものを過小評価した。功利的な合理主義の立場は、建築の機能的な側面を強調して、表現的なものの価値を過小評価することによって観念論美学に挑戦した。それに続く素朴な機能主義の立場は、この機能的なものとの表現的なもの、物質的なものと芸術的なものを、自動的に、無媒介に結びつけてしまった。機能的なものは美しいという安易な芸術論は、戦闘的なテーゼとしての役割は果たしたのであったが、現代的課題をになうテーゼとしての価値を失っていった。

これと対決をいどんだ社会主義リアリズムの陣営では「内容において社会主義的、形式において民族的」というテーゼを打ちたてて、この機能的なものと表現的なものとの野合を試みたが、これは装飾過多の形式主義におちいってしまったのである。

建築はこのような一面性の抽象からも、またその二面性の野合からも、決して正しくは理解されない。この矛盾にみちたもの——機能と表現——の統一の過程が建築の創造そのものであるということをつねに強く自覚する必要がある。その創造的統一を可能にするためには、現実の認識において、その土台と上部をその展開しつつある全体像において捉えることを必要としているのである。

しかし、この現実には、生産的労働により、また芸術的創造によって、不断に新しく獲得されてゆくものである。現実の認識とは、現実の現象のありのままの反映ではなく、獲得しつつある現実の反映である。言いかえれば、歴史的に展開し発展しつつある現実の主体的な反映である。このような

人間論とを混同しているのではない。私が「建築の創造は現実の認識の一つの特殊な形態である」と言っても、創造論と認識論とを混同しているのではない。それに従って彼はまた、私の言うような考えが、創作活動を研究活動のなかに解消し、さらに研究活動を政治的行動にみちびいた、いままでの苦い経験の源をなしていると言う。これは全く逆であって、創造と認識とは全く別なものであると考え、まず鉛筆をにぎる創作活動は、現実認識によってささえられていなければならないし、それが前提になる、しかも、その認識は研究活動や政治的行動によってのみ得られるものである、とするような葉山一夫的な考えかたが、彼のいう苦い経験の根源をなしているのである。だからこそ私は、建築家は建築創造によって、建築家としての認識を深めてゆくことができる、なにも自ら研究活動を行なったり、さらに政治的行動をしなくても、建築家としての認識は深められてゆくものであるし、逆に政治的行動に参加することによって、建築家の認識が深められはしない、と言っているのである。さらに進めていえば、建築家は、建築創造の方法的な体系にうらづけられた構想力によって現実を認識してゆくのである。「建築文化」一九五六年一〇月号には、このことについての私見を述べたつもりである。葉山一夫は、認識と創造とは一つの環であることを概念的に理解しているにかかわらず、実感として理解することができないでいる。認識は物質から精神へと、物質→精神→物質と進む、創造は精神から物質へと、物質→精神→物質と進むものと単純に考えている。しかし認識は、物質→精神→物質という実践的な環であり、創造も、精神→物質→精神という実践的な環であって、深く重なるものであることの実感が、彼には希薄であるように思われる。(一九五六年六月)

## 2 日本の伝統における創造の姿勢——弥生的なものと繩文的なもの

私たちがこの日本の現実に生き、それを克服する前進的な姿勢で創造に立ち向かうとき、日本の伝統が自覚されてくる。それは私たちの生きる姿勢、また創造のなかに無自覚にあるところのものを、現存として自覚することである。それは歴史的世界を対照的に見ることによって、さらにその自覚を深めることができる。伝統も外部にあるものであるとともに、内部に現存しているところのものである。伝統の克服などというとき、それは、外部にあるものの克服であるとともにむしろ内部にあるもの、自己の克服なのである。

日本の前歴史時代のものとして私たちに残されているものに、縄文土器がある。ここに自然との奔放な戦いのなかから生まれてくるような、量感にあふれた強靱な意欲と、自由で敏捷な感受性が現われている。この伝統は私たちに到達するずっと以前、狩猟の段階から水田農耕の定住の時代にはいったところで、断ち切られているように見える。私にはなぜであるかわからないし、西欧では、これと併行する歴史的過程で全く消え去っていないもののように思われるからである。定住の始まる弥生の時代には悟性的かがが現われてくるが、十分に成熟しないまま次の古墳時代に引きつがれ

てゆく。この時代は、人間集団のなかに個性的なもの、人格的なものが萌芽的に現われ、また民族の形成が行なわれてゆく英雄時代である。私たちはその英雄たちの古墳を知っている。

またそこに捧げられたはにわをもっている。このはにわに見られる素朴さ、楽天性は、自然や外界の克服といった積極的な意欲を失って、外界があるがままに、直接的に肯定し、妥協するという認識の姿勢のあらわれであって、しかもその人間と自然、自己と外界との統一をささえているのはアニミズム的、神性的なものであるといつてよい。それは古墳においてもっと明らかに現われている。これはエジプトのピラミッドに匹敵する平面的な規模をもったモニュメントであるが、しかしその形象は掘をめぐらされた自然の島のように見える。自然そのものを肯定的に神性化するアニミズムのあらわれであるといえるであろう。

ここにはピラミッドがもっているような、自然の中に反自然を対決させ、また自然に対する人間の力を表示する、といった抵抗的な意欲と姿勢は全くもっていないのである。

英雄的な民族から専制的な国家が生まれ出ようとする社会的変革のモニュメントとして、私たちは伊勢神宮という建築遺産をもっている。

それについて考える場合、日本の住居の系譜にふれる必要があるだろう。ここには二つの源流があるように思われる。一つは竪穴式住居であり、それは縄文の時代からのものと考えられる。そうして、高床の切妻型の住居は弥生の時代に現われ、この二つの形式は主として竪穴式のものが高床農民層のなかで発展させられ、高床式のものが高床貴族のなかでうけつがれたと考えられる。この

伊勢の正殿の形象化は、この高床式、上層貴族の住宅の神格化であったと言えるであろう。この表現には素朴ではあるが力強い、簡潔ではあるが格式の高い、そうして静寂ではあるが、暗いかげりが現われている。私たちがこのことをさらに深く自覚するためには、ギリシアとの比較が役立つであろう。ギリシアにおいて、同じように英雄的なものから国家的なものが生まれてゆく社会的改革の過程で、その英雄たちに捧げられたギリシア神殿、とくにその典型的なものとしてアクロポリスに立つパルテノンが対置されるであろう。

伊勢の鬱蒼とした森、その静寂さには私たちの襟を正させるような神聖なものが宿っている。これはほとんど自然そのものといつてよい森であるが、しかしこれはあざやかな、アニミズムの形象化であるといつてよいだろう。そうしてこのアニミズムは私たちのなかに、無自覚に、まだいまでも生きのこっていることに気づくのである。この森の奥深くに、四重の垣がめぐらされた神聖な場所がある。そこに私たちの近づくことのできない正殿がある。この正殿はまた私たちを感動させずにはおかないすばらしいものであるが、その感動の底には何か、ディオニュソスのなかげりが秘められている。

地中海と太陽とに対決して立っているアクロポリス、それは自然の丘でありながら、しかも人間が建設したように形象化されている。ここには自然を克服しようとする意志的なものが感じられる。そうして、その上に立つパルテノンの明朗さの中には、自然を克服したものの力の意識と栄光の自覚とが輝いているように思われる。

## 1 美しきもののみ機能的である

機能的なものは美しい、という素朴な、しかも魅惑的なこの言葉ほど、罪ふかいものはない。これは多くの気の弱い建築家たちを技術至上主義の狭い道に迷いこませ、彼らが再び希望にみちた建築に帰ってくることを不可能にってしまうに十分であった。彼らは「美しい」という言葉を、ひそひそとは語ったが、堂々とそれについて語ることを躊躇ちゅうちよした。機能的であることを主張して、その建築の醜悪さをかばった。その言葉には何かしら、安心感を与える魔力があったのである。

何か美しいもの、豊かなもの、そうして精神をゆすぶるものにあこがれて、建築の門にはいった若い学生たちも機能主義の洗礼をうけて卒業してゆくときには、すでに「美しさ」について語ることはタブーであるかのように、口をつぐんで、その門を出てゆくのである。

人の肉体を心地よくさせ、目を見はらせ、そうして精神を感動させる「美しさ」に背を向けていかざり、彼らは人間に背を向けていたのである。

バルテノンも、伊勢も、そうして法隆寺も、それらは人間のものではなく、神々のものであったとレットルをはるだけでは、建築は理解されない。それらは、「美しさ」のゆえにすべての人間のものであったし、またあるのである。同じ六畳の住居空間をとっても、このことは同じである。肉

体を心地よくさせ、精神をさわやかにする六畳も、それらをいらだたせ、不快にする六畳もありうるのである。

いかに高邁こうまいな社会的機能をピロティに与えたといっても、そこが、じめじめとして陰鬱であり、不潔であるならば、それはピロティではない。そこが、ピロティのもつ意味をつたえて、何か精神を打ち、肉体を動かすものをもっていなければならないのである。それは社会的連帯の表現として、ピロティでなければならぬ。ピロティの意味は、壁のもつ疎外的な表現から解放されて、軽軽と、また力強く、上部構造をささえるという形態の均衡にあるのであるが、これはまたピロティの社会的意味と対応するところのものである。

ある人は、この今の日本で、美は悪であるという。たしかに、そのような面がないとはいいきれないものがあるであろう。しかし、だからといって、生活機能と対応する建築空間が美を実現し、その秩序を通じてのみ、建築空間は、機能を人間に伝えることができる、ということを否定しうるものではない。このような意味において、「美しきもののみ機能的である」といいうるのである。

(一九五五年一月)

## 2 「はじめに機能がある」と「はじめに空間がある」

生活を伝統と進歩との、私的なものと社会的なものとの交錯した抵抗的な発展として、動的に見る立場からすれば、空間における限定性——秩序と自由——、時代性と永遠性——短期と長期——の問題に目を向けなければならないであろう。生活を進歩の、あるいは近代主義化の一すじのものと抽象し、そこに現われる生活機能の分化を生活そのものと考え、それによって生活空間をますます限定化してゆこうとする傾向は、またそこには、内部機能の素朴な表現が伴っていることが多いのであるが、素朴な近代主義——機能主義のなかに、きわめて濃く、現われているところである。とくにその限定された空間の結合の仕方の中には、偶然的なものが、普遍的なものと同時に現われがちである。

それにひきかえ過去の、住居、とくに農家や町家に現われたすぐれた典型となった住居の伝統のなかには、この空間の限定性≠無限定性が、たくみな輪となって、生活を包容していたことがよくわかるだろう。

かつて、このような住居は封建的と呼ばれた。私は、それはその中で行なわれていた生活機能の、また生活意識の封建性であって、その生活空間そのものが一義的に封建的ではないと

考えたいのである。私の考えを先取的にいうならば、機能と空間の対応は一義的であるのではないのである。「はじめに機能がある」とする立場と「はじめに空間がある」とする立場は、一見全く相反したもののように思われる。この「はじめに機能がある」とする見方は、認識として本質的であり、また「はじめに空間がある」とすることは、存在として根源的である。素朴な機能主義の立場からは見失われていた、この「はじめに空間がある」とする根源的なとらえかたは、再びよびまされる必要がある。

空間は本来、限定性と無限定性の統一である。また生活も、認識としては機能であり、またその分化が考えられるが、存在としては動的である。それは、すでにいったように抵抗的交錯として動的であり、また生物学的に流動である。

このような、建築空間と生活機能の対応が、建築創造の課題であるといっているのである。私は、建築創造の立場から、この二つの空間と機能とは、互に対応すべきものでありながら、しかもけっして一義的に対応しないものであり、それぞれが独立に本質的であり、根源的であると考えたいのである。そうして「はじめに機能がある」立場と、「はじめに空間がある」立場とは、建築創造においてはじめて統一されるのである。

(一九五五年一月)